

(参考資料)

東洋文化史概説 (1) レポート

司馬遷『史記・刺客列伝 第二十六』について

文学研究科文化史学専攻 3207XXXX

●林●子

今回、史記の『刺客列伝 第二十六』を取り上げる。この史記の『刺客列伝』は、五人の人物に焦点を当てている。すなわち、曹沫、専諸、豫讓、聶政、荊軻である。まず初めに、この列伝の要旨を述べたい。

曹沫は魯の人で、魯の莊公に仕えていた。曹沫は齊と戦い、三度敗北し、莊公はおそれて遂邑の地を献じて齊と和睦しようと試みる。そして、莊公と桓公が柯で会盟した際、曹沫は齊の桓公に、魯の侵略した地を返すことを約束させる。しかし、桓公はその後の曹沫の態度が気に入らず、その約束に背こうとした。その時、目の前の利益よりも、後の代償を考えた方がよいという趣旨の進言を菅仲が桓公にし、結果、桓公は魯の侵略した地を返し、曹沫が三戦して失った地は、魯にまた与えられた。

専諸は呉の堂邑の人である。その当時の呉は楚と争っていた。呉王僚は楚との関係についてどうすべきか迷っていた。伍子胥は呉王僚に楚を討つことの利益を説いたが、呉の公子光は、伍子胥が呉のためではなく、父と兄を殺された私讎のためだけの理由で進言しているのだと言った。そして、伍子胥は公子光が呉王を殺したいということを知ると、伍子胥は専諸が有能の士であることを知っていたので、専諸を公子光に推薦した。専諸は、王僚を殺すことを公子光と謀り、王僚を七首で刺し殺したが、王の左右の者に専諸は殺された。

豫讓は晋の人で、もとは范氏と中行氏に仕えていた。しかし、認められなかったので、去って智伯に仕えた。智伯は豫讓を非常に尊敬し、かつ寵遇し、国士としたが、智伯が趙襄子を伐つと、趙襄子は韓氏、魏氏と謀り合わせて智伯を滅ぼし、その子孫も絶滅して領地を三分した。豫讓は山の中に逃げ込み、智伯のために讎を報じて死ぬことを誓う。そこで、豫讓は姓名を変えて刑罰を受けた人になりすまし、趙襄子の宮殿に入り込んで、七首で刺そうとした。失敗して捕らえられたが、趙襄子は豫讓を義人、賢人とみて、そのまま赦して立ち去らせた。その後、豫讓は身体に漆を塗って癩病患者を装い、炭を飲んで唾の

ような声にし、顔かたちをわからないようにしたが、友人は気づき、豫讓のために泣いて趙襄子に使えたらどうか、という提案をした。しかし、豫讓は、それを拒否し、趙襄子の外出にあたって、豫讓は沿道の橋の下に潜み、暗殺しようとした。しかし、馬が何かに驚き、趙襄子は豫讓の存在に気付いた。趙襄子はそこで、豫讓になぜお前はそんなに智伯のために報じようとするのかと聞いた。豫讓は趙襄子に、范氏と中行氏は、どちらも衆人なみにわたくしを待遇したから、衆人なみにお報いした。ところが智伯は国士としてわたくしを待遇してくださいました。ですから、国士としてお報いする、と答えた。趙襄子は嘆息して泣いて、智伯のために尽くしたいということはわかったが、もう赦すことはできない。だからどうしたらよいか、考えてみよ、と言った。そこで豫讓は趙襄子の衣服を要求した。その理由は、自分を何度も赦してくれた趙襄子を称えるが、固より誅に伏す覚悟で、せめて、趙襄子の衣服を頂戴してそれを斬り、讎に報ずる気持ちを遂げたいということであった。趙襄子は、大いにこれを義として、衣服を豫讓に与えた。豫讓は、剣を抜いて三度跳躍してこれを斬り、智伯の讎に報じた。そして豫讓は、剣に伏して自殺した。

聶政は深井里の人である。斉で母と姉とともに、暮らしていた。嚴仲子という人物は、俠累という韓の宰相と仲たがいしていたため、俠累に報復できる人間を探していたが、聶政の噂を聞き、交際を求めた。嚴仲子は、聶政を善遇するが、聶政は母を養うために生きていると言い、自分の身を人に捧げることを拒む。仕方なく嚴仲子は礼を尽くして立ち去った。その後、聶政の母が、死んだ。聶政は、前に嚴仲子を拒んだことを思い出し、尽くしてくれたのに冷遇したことを後悔する。そして、聶政は、嚴仲子に会いに行き、あなたの仇を討とうと嚴仲子に言った。討つ際、沢山の人や馬などを連れて行くと、嚴仲子の身分がばれ、嚴仲子が窮地に陥ると危惧したため、聶政は独りで俠累を討ちに行った。聶政は俠累を討つという目的を果たすと自らの顔の皮を剥いで目を抉りだし、腹をかき切って腸をつかみだし、死んだ。その後、韓の政府が身元を調べるが、わからなかった。久しい間、そうだった。やがて聶政の姉はその話を聞いて、自分の弟だと思い、韓に行った。聶政の姉は自分の弟だと言い、母親のことと、どれだけ嚴仲子と聶政が誠実な人間だったのかということ話し、聶政の傍らで死んだ。皆、聶政と聶政の姉のことを褒め称えた。

荊軻は衛の人で、酒飲みだったが、読書と撃剣を好んだ。蓋聶と魯句踐と争ったが、どちらからも逃げ去った。その後、高漸離と交わり、田光先生に善遇された。その頃、秦と趙（政と丹）は争っていた丹は、田光先生に助言を求めた。しかし、田光先生は、自分ではなく、荊軻に助言を求めるべきだとして、荊軻を紹介する。その際、丹は、田光先生に

口外しないでくれと求めたが、田光先生は、自分は疑われていると思い、荊軻に事を頼んだ後、いや、自分は絶対に口外しない、約束は守るということを示すべく、自殺した。丹はその話を聞いて後悔して泣いたが、その後、荊軻と、秦（政）をどう退けるかを話し合った。荊軻は秦舞陽とともに、秦から逃げてきた樊將軍の首を持って、秦へ行った。荊軻は貢物の地図の中に匕首を忍ばし、秦王政に近づき、殺そうとするが失敗し、逆に殺される。その後、荊軻と仲が良かった高漸離も、秦王政によって殺された。

以上が、簡単な要旨である。この『刺客列伝』の五人に共通することは、その義が成就する、あるいは成就しないに関わらず、その志をあざむかなかったということである。すなわち、自分を認めてくれた人のためなら、自分の命を捧げることもできる、いやむしろ、そうしたいという希望があり、そしてそこには何よりも、その相手に対しての誠実さがあるように思われる。この当時の価値観というものは、こういった人間関係から作り出されたもので、今回取り上げた『刺客列伝』だけに限ったことではなく、史記、特に列伝に共通していると思う。そしてまた、やはり時代の背景も大きく関わっているように思う。つまり、多くの国が覇権を争い、いつ死ぬかわからないという状況の中、自分の信じたものために命をかけることができることというのは、そういった時代のもで生きていた人間にとって、最も幸せなことであり、そうして死ぬことが最も幸せなこととして捉えられていたのだと感じた。この『刺客列伝』を読んで、一つの信念や約束を守り抜くということがどれほど難しいことかを改めて感じ、また、今私が生きているこの現代でどう応用されるかと考えた時、それはやはり難しいと思った。もちろん時代による価値観の差というものもあるが、それ以上に、私たちの意識の持ちようが明らかに異なっているということがその要因だと感じる。しかし、私はこの『刺客列伝』を読んで、現代では見えにくい様々な価値観がそこには存在し、それとともに様々な生き方があり、それが語り継がれ、私たちが今を生きていく世界の中でのひとつの指針や選択肢となっているのではないかと考える。この史記が伝えているものは、そこに書かれていることだけではなく、それを通じて精神や心などについても伝えているように思われる。